



にほしま

善教寺と ハイ移民



1399(応永6)年冬 浪士菊池武憲ら一族3人が芸州に漂泊、ひとり武憲が根の地にとどまり庵室を建て真言宗の布教活動を始めた。数年後、八千代町上根に移り住み、1528(享禄元)年 浄土真宗に改宗して善教寺を開基した。

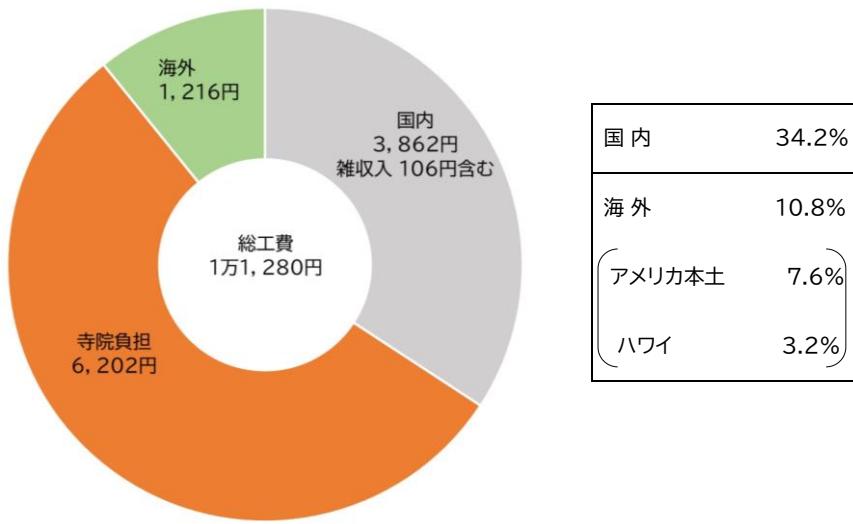
爾来、日常生活の言葉で分かりやすく教義を話し、仏教を親しみ易く身近な存在にした。やがて、寺院を信仰の場から心の平安を求める場に、集いの場としても地域の人々に利用され、着実に信徒が増えて行った。同時に「私たちのお寺」として信徒たちの心に連帯意識が醸成される事になった。

1899(明治32)年1月 老朽化した本堂の再建が決議された。

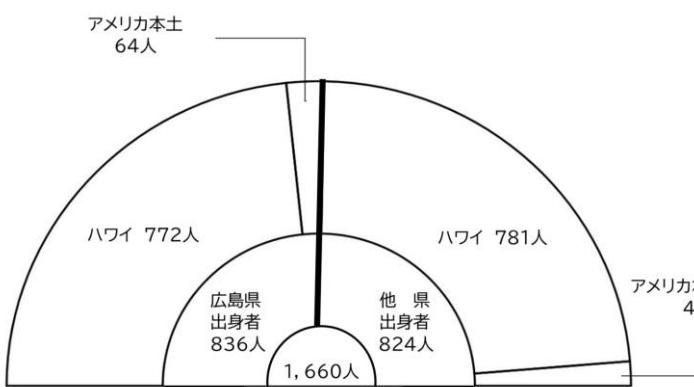
総工費1万1280円56銭1厘 寺院の負担金5151円47銭1厘、寄付金総額4971円80銭4厘、その内、ハイ・アメリカからの寄付金は合計1216円。実に24.5パーセントが海外移民からであった。

その本堂再建費収支精算表から見えてくるものとは_____

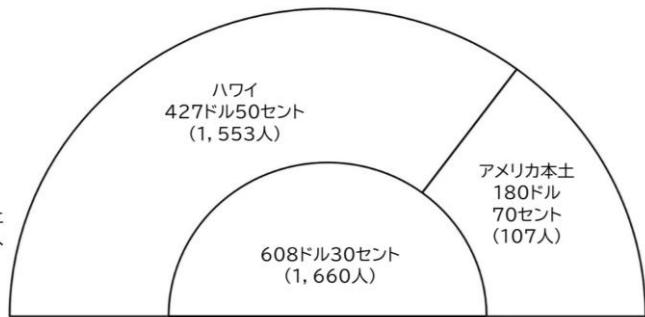
浄財の内訳



出身地別・在留先別の寄付者割合



在留地別の寄付金割合



1人当たりの浄財はハワイ 54銭(27.5セント)

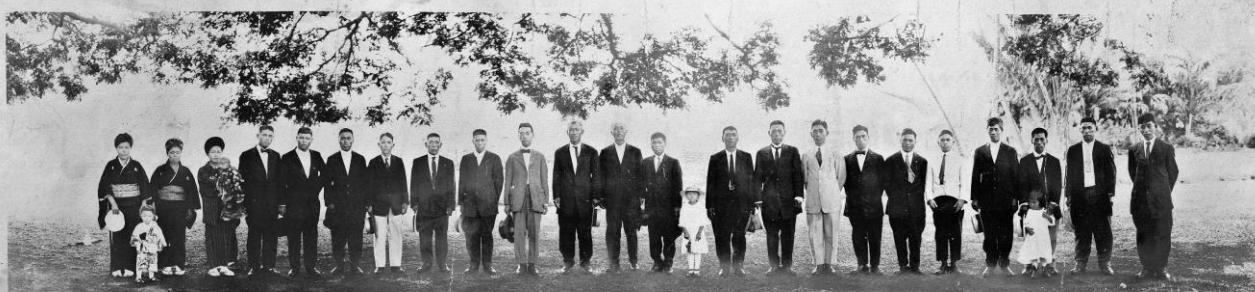
アメリカ本土 3円38銭(1.7ドル)

アメリカ本土の浄財額が多いのは、所得がハワイの2.16倍と高額で家計に余裕があったことによる。

善教寺住職第17世 神根善雄は広島英語学校に学び、「芸備日日新聞」の主筆から「京都毎日新聞」を経て西本願寺枢密科用係に迎えられ、1904(明治34)年には広島別院輪番となり、西本願寺に大きな影響力を持つ僧侶であった。

ハワイ・アメリカ・国内の浄財者は浄土真宗信徒を共通項としているが、出身県や出身地の垣根を越えてハワイ・広島県内の多岐にわたったのは、善雄が西本願寺時代にハワイ・アメリカの仏教の開教事情を調査視察したことに加えて、本土・ハワイの別院が、善教寺が寺院の再建を進めていることを傘下の寺院に伝えたことが推測として考えられる。さらに、仏教寺院の開基を移民たちが熱望していた時期と重なったことも見逃せない。

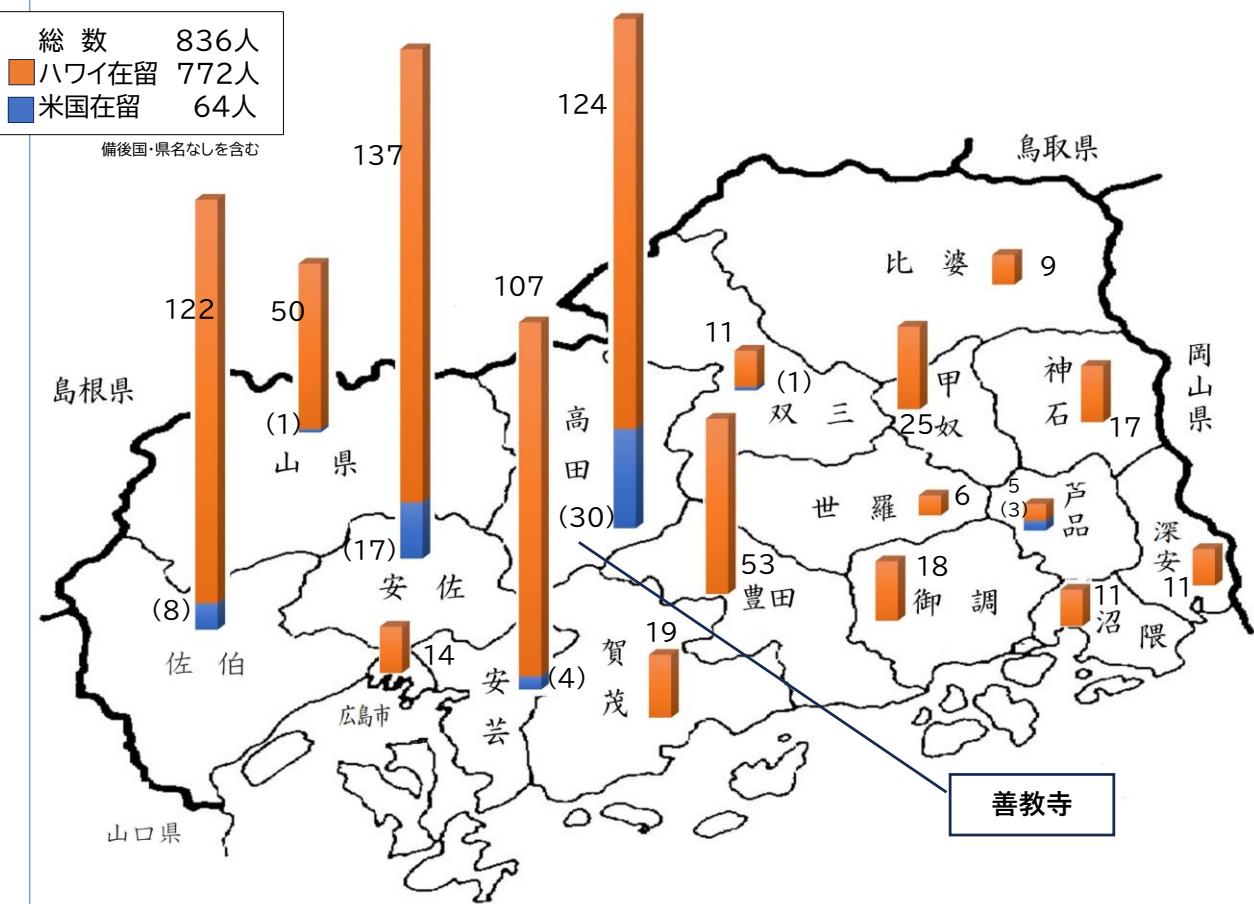
また、善雄の子息哲生も西本願寺に奉職した。



1919(大正8)年 ホノルル青少年教育の視察
神根哲生(善雄の子息)中央左蝶ネクタイ

広島県出身者の寄付者人数の出身分布図

広島県出身者の寄付人数



他県は、山口・福岡・和歌山・新潟・福島・宮城・滋賀・愛媛・福井・香川・岡山・大阪・群馬・石川・大分・島根・神奈川・静岡・岩手・長崎・奈良 総数824人

善教寺をめぐる年表

1528年	善教寺開基	
1897(明治30)	ハワイ在留の信徒が開基を請願	
1898(明治31)	浄土真宗ハワイ布教を始める	
1899(明治32)	再建起工	
1900(明治33)		
1901(明治34)		
1902(明治35)	第18世	
1903(明治36)	神根善雄訪布	
1904(明治37)	善雄広島別院輪番に就任	
1905(明治38)		
1906(明治39)	完工	
1907(明治40)		
		自由移民の時代
		ハワイ、アメリカの属州となる
		移民会社が移民をあっせん
		アメリカ本土への転向者が増え始める
		中央日本人会発足
		日露戦争勃発
		本土で排日運動が起きる
		日米紳士協約成立・本土転航禁止
		再渡航と家族呼び寄せを除き日本人移民渡航禁止

ハワイ、どんな時代であったのか

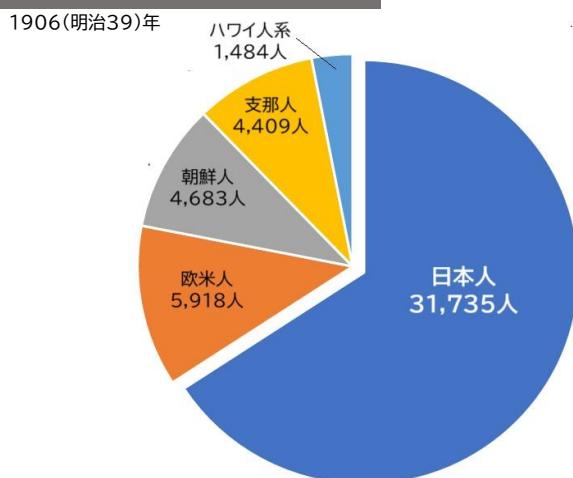
1900(明治33)年～1907(明治41)年 約71000人が渡航

1900(明治33)年8月 アメリカに併合されたハワイはアメリカの国内法が適用され、3年間の労働義務を強いた「労働契約書」が破棄され、移民は働き生きのプランテーションを選ぶことや、離職して新たな職種に就くことも自由になった。アメリカ本土への転職も自由になり、ハワイの2.16倍という高収入に渡航(転航)する労働者が殺到し、プランテーションでは人手不足が深刻な問題となつた。また、「給料のツケ払い生活費をやり繰りしていた労働者や顧客が「踏み倒して渡航」という思われぬ騒動が起きた。日本人商店の中には経営難に陥るものもあった。穏やかであった日本人社会は、転航騒ぎに浮足だった。

アメリカ本土では日本人移民の急増により、白人労働者の賃金が引き下げられるという事態となり、日本人排斥運動の大規模な火種になつた。

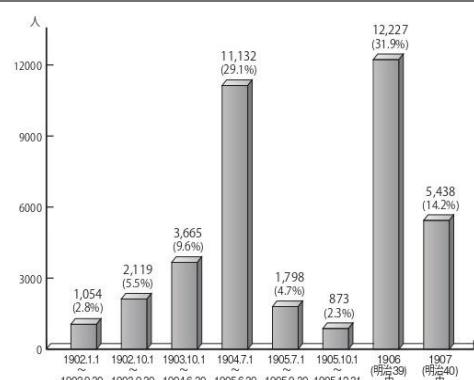
また、新たに渡航する者には、上陸後に必要な生活費として50ドルを携帯していることが求められたが、移民会社が「立替金、見せ金」という妙案を編み出し大量のハワイ移民を送り込んだ。

プランテーションの人種割合



日本人の労働者が約67%を占めた。

ハワイからアメリカ本土への転向者数



布哇からの転航者は、シアトル・タコマを足がかりにしてカリフォルニア・ワシントン・オレゴン・モンタナ・アイダホ・ワイオミングの各州の鉄道・鉱山・農園労働など従事した。賃金は1か月26日労働でおよそ39ドルから45ドル、ハワイの2倍以上になったが、低賃金に甘んじる日本人は本土の労働者を圧迫し不満を増長させた。

入江寅次『邦人海外発展史』上巻

プランテーション労働者の1ヶ月平均支出

耕地労働者の1ヶ月平均支出

1900(明治33)～1908(明治41)年

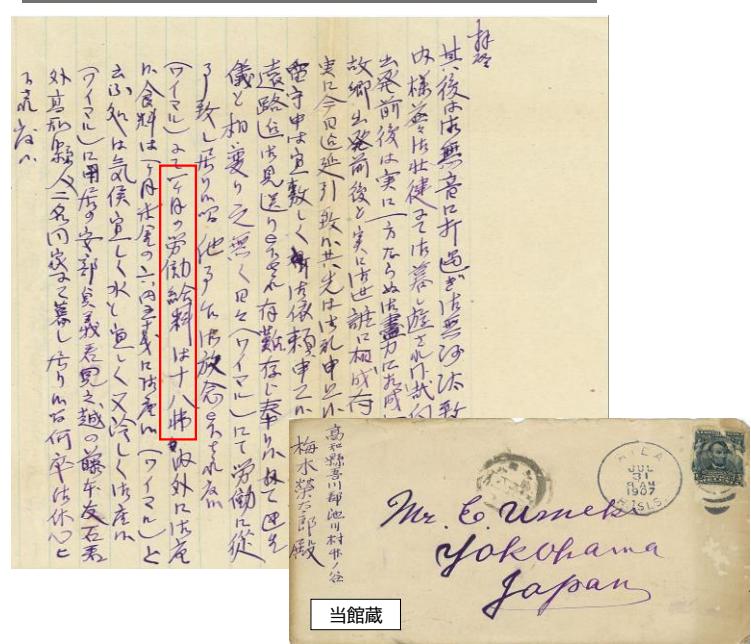
内訳金	ドル
コック代	7.00
風呂代	0.75
洗濯代	0.25
煙草ペーパーマッチ代	1.00
合羽即ち雨具代	0.50
石油代	0.15
合羽油代	0.15
寄付金	0.25
靴や足袋	0.60
切手類筆紙代	0.30
餞別や其他会費	0.25
帽子代	0.08
散髪代	0.15
友人や他交際費	0.25
労働衣類代	0.75
残金	12.50ドル

1908(明治41)年12月4日寄書 (日本総領事館 青葉生)

給料1ヶ月18ドル－生活費12.5ドル＝貯蓄額5.5ドル

家計簿には、0.25ドルの支出とあり、善教寺への寄付金額と符号する。

ハワイの給料1ヶ月18ドル 1907(明治40年) オアフ島アイエア



当館蔵